交差する信念。やがて、一つに（仮）

妄想野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交差する信念。やがて、一つに（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９１１５Ｚ

【作者名】
妄想野郎

【あらすじ】
記憶をなくしてしまった青年が、脳裏に残る唯一つの記憶。
自分と、ある男が対峙しているシーンが浮かぶ。
それ以外の記憶は持ちえはせず、日を追うごとに徐々に記憶を思い出していく。
そして、思い出した記憶の中で自分が、壊れていることに気が付いた。

「Ｌｉｆｅ」（前書き）

アーチャーの詠唱を捩ろうとしましたが、あんまり良い英語が見つからずのままなので、とりあえず後々追加という事で勘弁してください。

主人公も少しアーチャーに似せていますが、能力は似ているようで全く違うとも言い切れない（笑）

チーとではないです。

ご都合主義も一切ないように構成しています。

「Life」

◇◇◇

――Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｒｎ ｏｆ ｍｙ ｍｉｒｒｏｒ
（体は　写し鏡でできている）

Ｔｈｅ ｈｅａｒｔ ａｎｄ ｉｔ'ｓ ｂｏｄｙ ａｒｅ ｇｌａｓｓ ｗｈｉｃｈ ｃｏｐｉｅｓ ａ ｏｌｄ
（心とその身は　相手を写すガラス）

（感情など初めから持ちえはしなかった）

（無限に相手を写し続けた先には何も存在しない）

（故に生涯写し続けた鏡の意味は無し）

（最も憧れていた人物を映した鏡も意味無し）

（何時しか最奥には一本の剣≪理想≫が出来ていた）

（それは鏡が写し続ける壊れない剣≪理想≫）

（壊れない剣≪理想≫の後ろに、自分≪剣≫がいた）

（鏡≪自分の剣≫は、最期まで□を写し鏡に）

Ｓｏ　ａｓ　ｉ　ｐｒａｙ”　Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｍｉｒｒｏｒ　ｗｏｒｋｓ”

（その体はきっと無限の写し鏡で出来てきていた）

「止められない唯一の感情」

――気が付けば、目の前には母の顔があった。

住んでいた屋敷が、燃え盛る火によってドロドロと融解し始めていく。

その子供にとって、十二年。

思い出が詰まった屋敷が燃えていく様を否応なしに見せ付けられる。

この屋敷で、子供の親に当たる人物が雇っていた執事、衛兵、奉仕といった者たちはすでに一人残らず惨殺されていた。

見ているだけで悲惨な状況なのかが分かる。

すでに人の気配を消す屋敷に一人。

すでに止める事が不可能な業火の中に一人。

その屋敷の唯一の跡継ぎであった子は生きていた。

見るからに、その子供は目に光を宿してはいなかった。

つい数時間前には年相応の笑顔を浮かべていたはずのその子の家

庭は壊されてしまった。

付近には、首から上が無い死体が有り、その死体が女性であると体の胸の部位が告げていた。

その、首から上が無い死体の本来あるべきものを、その子供が手にしていた。

自慢であった美しく可憐であった母の顔は、恐怖か驚愕か絶望か、他の負の感情に染められた所為で酷い顔になっていた。

母の顔を、自然と幼い自身の体の胸に抱く。

大好きな母の”顔”をただ、抱きしめる。

割れ物を扱うようにそっと胸の中に。

涙は、流れはしなかった。

初めから、気が付いていた。理解していた。

見て見ぬ振りをし続けてきただけだった。

逃げて、逃げて、逃げて、何れ直面しなくてはいけない事実を遠ざけてきた。

だが、今まで必死になって遠ざけてきたものは、簡単に目の前に現れてしまった。

母の『死』、という事で。

きっと、他の誰かがこの状況を見たら奇怪に思うだろう。もしくは、奇妙に思えるはずだ。否、思えない筈が無い。

首から上しかない顔を、小さな体の幼子が己の胸に抱き、涙を流さずにただ、何もいない虚空を見つめている状況を見たら。

「はははははははっ！！」

子供は壊れたように笑う。

その目は、憎悪と復讐に染まり、ただ燃え盛る炎を瞳に映すだけだった。

「何が貴族だ、何が私が守ってみせるだ！！　世の中の人間が、こんなにも腐っていたなんてっ、気付きもしなかった！！」

子供は、信じてきた物に裏切られ、周りにいた人間がどれだけ汚い奴らなのかを見せ付けられて、その怒りをただ、虚空に向かって吐き続けている。

そんな世の中に住んでいて、人間の醜さに気が付かなかった自分に怒りが沸いている。

今まで、周りにいた奴等は擦り寄ってきた汚い害虫のような連中だと。

幼い彼の認識を改めるには十分だった。

「こんな世界なんて壊れてしまえば良いんだ。母さんを手にかけた

連中は生かしておいちゃいけないんだ。そんな奴等に、絶対に復讐してやるんだ、みてろよ世界！！　俺が全部殺してやる、ぶっ壊してやる！！　貴族なんて物が在るからいけないんだ。人間の醜い欲があるからいけないんだ。そんなものは俺が消し去ってやる！」

子供は、狂って行く自分に止めを行わなかった。

心のどこかでは分かっている。

分かっているのに、どうしてもこの感情だけは抑えることが出来なかった。

自分がしようとしている事は間違っている。それは、きっと意味を持たない。

だが、あれほど、誰にでも優しかった母が、その見返りを求めずに行った行為を不自然に思い、裏が在るんじゃないかと間くぐった人間が束になって殺したことに納得がいかなかった。

無駄に貴族としての地位が高かったのがいけなかったのか。

ただ、困っている人を助けたかっただけの母の行為がなぜ、殺される結果になるのか。

ずっと、憧れていた。

困っている人を助ける母の背中を見るのを。

周りのみんなが笑顔でいてくれたら幸せだと言った母が浮かべる慈悲深い笑顔を。

何も無かった俺に、只一つの道を示してくれた母に。

誰よりも笑顔が似合う人だったのに。

母の顔は、もう笑顔になることは無い。

今でも浮かぶ全てを包み込んでくれるような包容力を持ち合わせていた母の慈愛に満ちた笑顔は戻ることは無い。

或るのは、恐怖に染まった顔をした母の顔。

見開いていた目を、幼い彼は己の手で母の瞼を閉じさせた。

「許さない。許さない。殺してやる。殺してやる。死ぬよりも辛い目に合わせてやる……！」

怨念のように呟くその姿は、酷く歪で儚げな存在だった。

子供は、最期の別れを惜しむようにその手に持つ母の顔を抱きしめ、そっと地面に置いた。

そして、子供はその場を去る。

他に、その場には誰もいない。

そこには、燃え盛る屋敷に、復讐の為に生きる決意をした子供の背中がただ映されているだけだった。

彼は行く。

報われぬ道へ。

脆く、今にも崩れそうな崖を。

その小さな体で、内に大きな物を背負って。

「ｓｔａｒｔｅｄ，ｓｔｏｒｙ」

見渡す限りには、とても新鮮な空気を思わせる森林が存在している。

大自然の中、周りは木々に囲まれ、息を吸うたび、体内の毒素がすべて入れ替わり新鮮なものへと入れ替わるような神秘的な森。

外的の進入を許さず、入ったら最後、『死』を漂わせる殺気。

矛盾した二つの条件化の中で、青年は目を覚ました。

青年は、まるで、長い眠りについてたのか、前後上下左右が分からずに居た。

徐々に、重たそうな瞼を開き視界を得る。

「うっ……！！？」

今まで、眠っていた青年にはこの大自然に溢れているわずかな光でも目が耐えられずに再び閉じてしまう。

目を閉じているのにも拘らず、目は光りに遣られている。

脳裏に霞む、一人の男と、私。

ただ、それ以上は何も写らない。

見えない。

その先にある物は、何処か遠くへ行ってしまった。

「ここは……？」

何時しか、目は普段道理と変わらずに機能した。

「森……？」

見渡す限りの大自然、気が狂いそうに成るほどの果てしない先。

「一体何処なんだ？　早く、帰らないと――……何処に？」

気づいてしまった。

理解してしまった。

何気ない自身の一言で彼は自分が置かれている状況下を現状把握してしまった。

「何処に帰れば良い？　私は――誰だ？」

脳内の記憶と言うものを引っ張り出そうとしても、出てくるのは荒れ果てた戦場に、息の詰まるような重圧感の中にいる一人の男と私。それだけ。

住んでいた地域や家、ましてや家族、自身の名前さえも出て来はしなかった。

思い出せない。

「……」

思い出せないものは思い出せない。

此処が何処なのか。

何処に行けば何が在るのか。

自分の家が何処なのか。

知っていて当たり前が、彼には思い出せなかった。

ただ、驚きはしなかった。

何故か、記憶が無いことが当然であることを認めていたように感じていたから。

「この森を抜けなければ話にならないな……」

地面から腰を上げる。

幾ら、記憶が無かろうと生存本能は持ちえている為に現状を回避する為に頭は無事に回転していた。

余り意識はしていなかったが、自分の背丈や体重までも忘れていることに気づいた。

「かなり鍛えられている。背丈も随分高いのか？」

周りの木々の所為で自分の身長が高いのか低いのか判断が着かない。

見るからに、この森の樹齢はかなりの年数を重ねているのが一目で分かる。

だが、樹の樹齢から読み取れることは極僅かに過ぎない。

この場は何百年と放置されている場所。

人の手に触れず過ごして来た土地。

本来なら開拓されていてもおかしくない筈なのに。

手は一切加えられていない。

考えられることは、ここはきっと自分の知らないところだという事。

「もしかしたら、巨人とやらがいるかも知れんな」

自分で言いながら苦笑いを溢す。

この俺でも、もし、位は考えるものだ。

御伽噺のような、そんな不思議な存在がいるかもしれないと。

「そうか……私はどうやらお堅い人間だったのかも知れんな」

自然と自分の口から出た言葉の違和感に勝手な推測を入れる。
身体とは自然と脳と同じように動作を記憶している。
ならば、身体が覚えていても何等不思議ではない。
「さて、このまま野垂れ死ぬ前に森を出ようとするか」
軽く、ストレッチをして身体を解す。
自然と屈伸から始める。
見るからに大自然であって、猶予が無い。
暇を持て余していては、身体が根を挙げてしまいかねない。
なら、善は急げだ。
青年は、軽いジョギング感覚で走りだした。

◇◇◇

数時間、青年は無限に広がっていそうな森の中を走り続けた。
彼にとって思いのほか、体力があり、かなりの速度を出しても息が上がらなかった。バテなかったと言った方が良いかもしれないが。
１００?を7秒前後で並走しているのだから、これをかなりの速度と言わず何と言うのだろうか。

だが、それは良い。

そんなことは今考えるべきことではない。

「一向に抜けられん……。この森は迷宮か？」

そうなのだ。

森から抜けられない。

いくら、体力があろうと数時間もある速度で走り続けても出られ無いのであれば、この森は大規模な迷路といったところだ。

比喩表現であった無限大に広がっていそうな森は事実かもしれない事に厭きれ≪意味：いやになる≫が感じられる。

「やれやれ……幸先が悪いな。私の運もその程度か…」

軽そうな口ぶりだが、内心腹を括り、抜け出すのにそれ相応の覚悟を決めようとした所に、何か≪・・・≫がいた。

何かが見えたのと同時に青年は樹の影に身を隠した。

「騎士……？　それに、動物？」

自分で呟きながらも違和感を覚えた。

そう、騎士。と言う言葉だ。

察するに、余り使われていなかった言葉のようだ。

何度も口にした経験があるとは到底思えないのだが何か引っかかる。シックリこないというべきか。

「そういえば、私は目も良いらしいな」

何食わぬ顔で木の陰から騎士らしき物と、動物を見ていたが、距離は?を越えて離れている。

だが、流石に見える限りでは体全体を甲冑の鎧を纏う一人と動物だけ。

「記憶を失うのはやはり、面倒だな」

記憶が無ければ、世間一般で言うあたりまえが、どの程度なのかが分からないのである。

こうして、?離れている先のものを正確に見えることが普通なのか、そうでないのかの判断が着かない。

「全く、困ったものだな」

青年は、より正確に騎士の存在を明確にするために、彼等にとって死角になるように且つばれない様に物陰を駆使しながら慎重に、されど迅速に近づいていった。

彼らとの距離が縮まり、近くに寄れば寄るほど、金属音が甲高く辺り一体に鳴り響く。

騎士の両手には大きな大剣が握られている。

見る限り、騎士の体は余り大きいとはいえない。

自分の感覚が間違っていないのなら慎重は良いとこ１６０前後と青年は考えた。

ただ、どうやら先ほどの考えを改めなければと青年は思い始めた。

先ほどにも言った通り、金属音が鳴り響いているのだ。

詰まる所、青年が言った動物とはかけ離れた存在と騎士が戦っているのだ。

知識から引き出すと、熊という結論なのだが、どうも知識の中の熊よりも凶暴性がある。大きさも倍以上なのが確認できる。

「ふむ、騎士のほうは、まあそこそこの物だが、少々相手が悪いな……」

騎士は検討しているほうだ。騎士の大きさよりも数倍でかい者と引かず劣らずをしているのだから。

善戦しているのは間違いない。

だが――

「体力的問題、だな……」

騎士は、身の丈よりも大きい大剣で、敵の攻撃を弾き、斬り付け

る筈が、力押しで負けるを繰り返している。

すでに熊の、鈎爪を防げているだけでも精一杯のように見える。

「ウウウゥ、グォオオォオォオォオオオオオオ！！！」

熊が、寄生をあげる。発した寄生が振動として辺りに響く。

地面も心成しか揺れている。

力は増し、一つ一つの攻撃に重みと速度が増した。

もう、騎士には凌ぎ切る余力は残っていない。

そして、熊が鈎爪で騎士の胴に向かって振り下ろす。

すでに、剣を持ち上げられない騎士は為す術≪すべ≫なく死ぬ。

「させるかっ！」

予想された光景を防ぐまいと、瞬間的に脚に力を入れて弾丸のように物陰から戦場に飛び出し、騎士に体当たりの用法で熊の攻撃から騎士を逃れさせる。

「っ…う……！！」

騎士は、青年の体当たりの所為で繋がっていた意識が落ちかけている。

青年は心の中で騎士に謝りながら、騎士の持っていた大剣を自身

の手に取り熊と相対した。

現状、熊を倒さなければ騎士との会話によって知っているかもしれない出口を聞きだすことも出来ない。

ましてや、生き残ることさえ不確かだ。

「殺す≪倒す≫しかないか……」

気が引けるが、殺るしかないため、青年は両手に力を篭めた。

同情した訳ではない。

猪突猛進で突っ込みながら振るう鈎爪を屈みながら避け、開いた脇をすり足で潜り抜けて背後に廻る際に踏み込み、両手で振り切り熊の腹部を斬り付ける。

初めて使う武器の違和感は拭えないが、斬り付けた腹部から血が噴出し、顔に掛かるが青年は眉一つ動かさない。

感覚は申し分ない。

手に持つ大剣の切れ味は相当なものである。

だが、この剣では本来の自身に適した戦い方が出来ない――。

剣≪相棒≫とはそれぞれの主人にあった長さや重心などがあり、それらが合ってなお、かなり長い期間を経てこそ担い手となるが。

そうでないならば、幾ら剣としての性能が高くとも発揮しえるこ

とは出来ない。

「くそっ……やはり双剣か”アレ”でないと肌に合わん。それに本領が発揮できん……――」

―なに？

一瞬、世界に静止がかかったような気がした。

「……」

―俺は何を言った？

双剣でないと本領が発揮できない？

俺は、双剣使いだったのか？

青年は戦いの最中でありながら、自身の口走った言葉に疑念を抱いていた。

まるで、戦い慣れて入るが、本来の剣≪相棒≫でない為に苛立っているかのように。

「どうでもいい。とりあえずこいつ≪熊≫がさきだ」

頭を振り払い思考を止める。一回、たった一回斬り付けただけでは目の前の熊は倒れはしない。

決定的な致命傷を与えない限りは暴れ続ける。

熊は、回転しながら両手にある鈎爪を遠心力に乗せて振り回す。

一本、一本、大剣で弾く。ぶつかり合う武器同士で火花が散る。

その一撃は、重く、速くとても何度も防げるものではない重さであり速さであった。

ギリギリで見える熊の振るう腕。何度も見続けた結果、自然と身体が動く。

まるで先程見ていた騎士の様に。

それを、どれ位かは知らないが戦っていた騎士に賞賛を送りたい気分だった。

剣の重量は、剣としてかなり重い部類に位置するのものだ。

「……っ！！」

”青年にとっての武器”で無い限り受け続ける事は得策ではなかった。

これ以上、熊の振るう攻撃を受けない為に、暴れまわる熊の猛襲を精神を研ぎ澄まして避けて、避けて、避けて、開いた隙を斬り付ける。

腕、腹、脚、脇、鎖骨、太股と部分部分を小まめに斬り傷を散りばめ、徐々に体力を削ぎ落としていく。

いつの間にか、熊の動きは鈍く、地面を見れば血が大量に流れ出て、黒赤色の水面でも作りそうな勢いであった。

それを、好機と見て青年は鈍い熊の攻撃手段、腕を、手に持っている剣を上段から一気に振り下ろして肩からバッサリと切り捨てた。

切り離された腕と共に、熊は泣き叫ぶように声を張り上げた。

その声にははたして、腕を切られた痛みか、単なる怒りから来るものなのかは分からない。

ただ、青年には目の前の熊を生かしておく道理は無かった。

青年と熊の戦う最中、少し離れた場所にいた騎士は目を覚ました。

体中が熊と戦った所為か重く、起き上がるのにやっとのようだった。

だが、騎士は自分がどのような状況で気絶したのかを思い出し痛みを堪えながら瞬時に立ち上がる。

「剣がない……」

騎士は、握っていたはずの自分の剣が無い事に気が付き焦る。

――アレが無くては立ち向かえないではないか。

騎士は辺りを見渡し現状把握に努めた。

すぐ近くには、その手に剣を持ち『アレ』と戦っている黒髪の赤い外套の男がいた。

そう。青年だ。

「一体どうなっている？　あの男、私の剣を使って…」

騎士は、どうして今のような現状になっているのかが分からなかった。

だが、それは好機として身体を少しでも休めることにし、戦闘を見ることに徹することにした。

今の手負いの自分では何も出来ないことを理解しているから。

「それにしてもあの男、出来るな」

騎士から見ても、青年の、黒髪の赤い外套の男はかなりの剣の心得を持っているように見えた。

少なくとも、自分よりは格上の剣士だ。動きや足の運び、反射神経。何より腕力がどれも騎士を上回る。

「うまいな、アレの動きを見切って上で開いた隙に攻撃を……だが、あまり私の剣を使いこなせていないようだが……でも、あの戦い方はどうも私と…」

赤い外套の男が使っている剣は、騎士のものだ。

使いこなされては困るのだ。

心理的にも。ましてや、”似ている“とは思いたくなかった。剣の構え方、足の運び、そして、剣の重心を理解し、それを最も効率よくうまく使う姿。

目覚めてから、最初こそ赤い外套の男の動きは我流だったが、時間が経つに連れ騎士の知っているものに徐々に近づいていった。まるで、剣に合った使い方に最適化されていくように動きが上書きされていく様を見ていて騎士は言葉をもらさずに入られなかった。

「同じに見えてしまう……」

そんなことを騎士は認めたくなかった。

青年は、最後の決め手に掛かっていた。

すでに熊の動きはあるようで無い。

動く体力すら削り取った。

多量に血を失った目の前の敵は、人間と同じく血を失いすぎて貧血と同様の効果が現れているのか目の焦点が合っておらず、今にも倒れそうであった。

そんな敵に慈悲も与えないように赤い外套の男は言い放った。

「終わりだ」

大剣ならでは、正面から懇親の力を篭めて首を斬り払った。

首から上が無くなった熊との対決に疲れが出たのか、気を抜いた瞬間に脚から力が糸が切れたように抜けて地面に倒れた。付近には斬った箇所からシャワーのように血が噴出するが気に留める余裕が青年には無かった。

「はあ、はあ、……疲れるものだな」

青年は、この戦いで自分が以前戦場に身を置いていたことに自ずと理解した。

余りにも身体が慣れすぎている。

今現在疲れているのは、記憶と身体のギャップの所為と咄嗟の覚悟の差と言った所だろう。

記憶が無く、記憶をなくす前に何を持って戦いに望んでいたのかが欠けている。

それが一体、どんな望みなのかはまだ分からない。

息も落ち着いたところで、体中に付いた血を拭いたい気持ちだったが、気絶した騎士のほうを向くと意識を取り戻していたのか、立っていた。

騎士は、向こうから青年に近づいていき話しかけた。

「すまなかった。私の代わりに戦ってくれたのですね」

ありがとう。と頭部につけていた甲冑を手にとり言った。

が、青年は口をアングリあけて惚けてしまった。

騎士は、女だった。

少し背格好の低い男だとばかり思っていた。

それも、金髪のショートよりも若干長くて紙を後ろでポニーテイルのようにゴムで結んでいて瞳は翡翠の色であり、同時になぜか心臓の高鳴りを覚えた。

顔立ちは、今までに見たことのないようなキレイな顔。整った部位。自身の思い描く西洋の美人に完璧に当てはまった。

別に記憶を思い出した訳≪わけ≫ではない。

ただ、純粋にそう思えただけ。

「？」

返事をしなかった為か青年に顔を近づけてきた騎士に対し、青年は後ずさりしドギマギしながらも答えた。

「あ、ああ。き、君が苦戦してやられそうになっていたので代わりを務めたまでだ」

「いや、ありがたい。そうですね、貴方の名前を教えてくれないか

？　此処でであったのも何かの縁だ。ちなみに私は、リエラ・アルブラートだ」

「良い名だな。君に実に似合っている」

若干、頬を赤らめながら言う青年にリエラは、好感を得てリエラも恥ずかしげに頬を赤らめた。

誰しも、褒められて嬉しくないわけがない。

「そうですか、嬉しい限りです。貴方は？」

「……っ」

「？」

純粋な彼女、リエラの気持ちが青年には重く感じた。

普通ならば、軽く言える言葉を、今の青年には言うことができない。

「すまん。言えないんだ」

「……そんな。何か特別な理由があるのですか？」

途端にしょんぼりとしたリエラには申し訳なさがいっぱいだった。

「ち、違うんだ。私は、自分の名前が分からないんだ」

「分からない？、まさか記憶に障害でも……」

最後まで告げはしなかったが理解してもらえた。

「ああ。自分の故郷の名、家族、自身の名前が分からない。曖昧だが、常識的な事は思い出せる。ただ、此処が何処なのかが分からない。どうして此処にいたのかも分からないんだ」

「…そうでしたか。……よし、決めました」

青年にはリエラが何を決めたのかが分からなかった。ただ、何となく予想が出来てしまったのは、少しの会話でリエラがどのような人物なのかを見極めた≪写した≪・・・≫≫からかもしれない。

「一体何を決めたんだ？」

「私に着いて来て下さい。しばらく面倒を見てあげましょう」

まるで、えっへんとか付きそうなほど、余り言ってはいけないが無い胸で胸を張っていた。

「……何か？」

当然のように俺の考えが見透かされたのか、後ろにゴゴゴゴッ！！　とでも付きそうなほど黒い炎が漂っていた。

少なくとも、これでしばらくの目処がたった青年は安堵していた。

彼女に付き添えば、無事この森を抜けられるし、しばらく面倒を見てくれるとも言った。

その間に、この世界のことを教えてくれるのだろう。

たった僅かな会話で、リエラと言う人物がそういうことをしてくれる優しい人だと理解できた。

「いや、気にするな。気に病むことはないぞ」

「なっ、気に病むことは無いとはどういうことですか！？　私には”胸“が必要ないとでも！？」

どうやら余計なセリフでリエラの逆鱗に触れてしまったらしい。

此方の弁明も聞き入れるつもり無く、喚き散らす。

こういうのも、なんだか良いものだ。

まるで、記憶が合ったころにはそういう経験をして来なかったような錯覚に囚われた。

多分だが、そうなのだろう。

記憶を失ったのも何かの縁として受け入れて、羽を伸ばすのも良いかもしれない。

「ちょっと！！　聞いているのですか！？」

青年がリエラの言葉を無視したのがさらに怒りを増し、赤くなる。

「そんなに怒らずとも良いではないか。さあ、行くぞ」

「何が、さあ行くぞ。ですか！？　出口も知らないくせにしてどの口が言いますか！！？」

「この口だが？」

ムキーーー、と暴走機関車にでもなったかのようになるが青年は笑って誤魔化す。

傍から見ればジャレ合いにしか見えない。

とても、ついさっき合ったばかりの人とは思えない急接近振りだ。

はたして、これがどこまで続くかは神のみぞ知るところだ。

「動き」

◇◇◇

青年は、騎士に何処か水がある場所を知らないかと聞き、どうして、と疑問を抱いていたが、青年の血を浴びた姿を見て納得し、頭なの中の地図を使って案内して貰う。

青年は身体を水で流し、同じく、先の戦闘で怪我をしたリエラも傷口を洗い二人は歩いていた。

「それにしても、随分と歩いているが、一向に出られる気配が無いのだが」

「いや、それは騙されているからです」

「騙されている？」

リエラと青年は出口を目指し歩くが、青年にとって出口に辿り付ける様な感覚が一切して来ないのが発端だった。

「はい。一度でもこの森を外部から見ればある程度は平気なのですが…なんせ、此処は迷いの森ですからね」

―迷いの森。

一体どんなファンタジー世界だと笑いたくなった青年だった。

どうやら、少なからず記憶を失う前の世界観を取り戻しつつあった。

青年にとっては、騎士とか言う単語は何世紀も前のものなのだろう。

だが、下手に吐露してリエラに疑われるのも宜しくない。

なら、まだ記憶喪失が酷いと言っておけば良い。

生憎、全く記憶を思い出す傾向は今現在も見えないが。

「やれやれ。無事に記憶は戻るのだろうか……」

最悪、一生戻らない可能性もある。

それはそれで良いのかもしれない。

だが、唯一。

記憶に残っているシーンがある。

目を瞑れば、辺りは焼け野原で、高いビルや建物が建っていたそこ等には崩れた鉄くずしか存在せず、煙が蔓延した中、その場には何千と言う死体と火傷に苦しむ人間が転がる中、一人の男と対峙する俺。

男は素手、俺は赤い外套を身に纏い両手に双剣を手に男に向かっ

て駆け出す。

これだけ。

この中から探そうとしても見当たるわけが無い。

「あ！　出口です」

諦めながらも記憶を呼び起こそうとしていた青年はリエラの言葉で我に返り真意を確かめた。

「それは……どうやら本当みたいだな」

目の良い青年はすぐに目の先が出口になっていることを教えてくれる。

「まず此処から何処に向かう手筈だ？」

「はい、まずはすぐ近くの小さな町まで行き、休息を取ってから再び祖国に向かいます」

「そうか……。時にリエラ、君は祖国と言ったが、何か位≪くらい≫の高い人物なのだろうか？」

「え？」

まるで、どうしてそう思ったの？　とでも言いたげな目で此方を見据えていた。

「いや、今までの態度を変えるつもりは無いが……その、君の事を

知っておかねば後々有名人でそれ相手に無礼を働いていたと言う事が発覚した時、処刑首にもされたらと思ってな」

念のためだ。

そう、付け加えてリエラに答えた。

過程の話だが、もしリエラがそういう上流階級の人間だとし、一般の人間と関わるのを禁じられているのに大して本人は普通に接したい。

そう、願う人間でなければ、下手に私に世話を焼いたり、話し方が丁寧語になるはずが無い。

だが、下手に詮索せずにもし、何も知らずに事を起こせば、大変なことになってしまう可能性がある。

「その、……待ってはもらえませんか？　必ず貴方に私のことを話します。ですが、その……不安なんです」

—何が？

とは聞かない。

「ああ。リエラが私に何れ≪いずれ≫話してくれると言うならば待つとしよう。女性を待つと言うのも男の役目であろう」

「ふふふ。そうですか……、では、待っていてくださいね」

リエラは青年の言葉に安堵し、年相応の輝かしい笑顔で答えた。

「……」

その瞳の奥に潜む闇を、青年は見逃さなかった。

◇◇◇

ある場所の地下。

入り口は巧妙な防壁で、誰も近づかせない強固な場。

万が一に場所が知られても、幻術の類に騙されている≪・・・・・・≫という徹底ぶり。

そんな秘密基地の内部、最も奥に位置する場の椅子や机一式を前に、男が呟いた。

「……目覚めたか――」

空気が薄い。

明確な光が無く、どんよりとした雰囲気が充満している。

薄暗く、薄気味悪い場所で、まるで何かを写す映写機のような物を浮かんできそうな、特殊な丸い水晶に映る？青年”を見ながら。

ちょうど、時間軸で言う、青年が森林の中で目覚める前の時間。

「……ようやく。――が目覚めたならば俺も行動に移すかな。精々

俺を止めてくれよ、”正義の味方さん”」

男は青年に向かって語りかける。

決して聞こえないはずなのに、どこか届いて欲しいと願っているかのように。そして、どこか嘲笑うように声を漏らす。

男は、暗闇に向かって手招きをすると、漆黒のマントに身を包んみ顔を仮面で隠している存在が現れた。

先程まで、気配を微塵も感じさせなかったのはこの仮面の技量が物を言っているのだろう。

男は、その姿を何度も見て知っているため特に動じることなく話しかける。

「全部隊に伝えろ。？例”の作戦を実行すると」

男がそう言うと、漆黒のマントが驚き肩を振るわせた。

「……それは本当ですか？　今までずっと時が来るまで待つと言っておられたのに…」

「ああ。その時が来たんだよ。あいつが目覚めたんだ。正義の味方が。これでやっと条件がそろった」

「正義の味方……ですか。では、本当に伝えてよろしいのですね？」

正義の味方という言葉に若干、意味不可解な言語に戸惑うも、確認するように漆黒のマントは男に問う。きっと、漆黒のマントは正

義の味方などいる筈も無いと思う一人なのだろう。

「あぁ。今すぐにだ」

迷いの一切を感じさせない答えに対し。

御意。

そう、漆黒のマントが言うと姿が砂のように消えた。

当然のように有った筈の気配はやはり、欠片も残されてはいなかった。

「始まるぞ、――。頑張れよ、正義の味方≪・・・・・≫よ。お前が私に齎す物、裏切らないでくれ」

憎らしく呟いた言葉に続いて高笑いがその場に響いた。

その手に、決して有ってはいけない魔法によって現れた紙≪・・・・・・・・・≫を見ながら。

「異能な力」

◇◇◇

青年とリエラは、リエラを筆頭に村へと向かっていた。

道無き道を歩きながらも確実に目指す村に近づいてきたころにはリエラの容態は次第に露になっていった。

「はあ、はあ、はあ、くっ……」

荒い息を吐き、歩くのも辛そうにしている。

おそらく、予想以上に熊の攻撃が響いていると見える。歩いてきた地面にはリエラの傷口から湧き出る血が落とされている。

だが、下手に手を貸す気にはならない。

そうやってしまえば、彼女の何かを折ってしまう気がした。

それは、彼女なりの譲れない一線だと考えている。

もし、本当にダメそうならば手を貸すつもりだ。

「リエラ。後もう少しだから堪えてくれ」

顔を伏せながら歩くリエラに語りかける。

「……はい。…はあ、…」

何もしてはいけないというもどかしさを感じながら村に着いた。

「……」

青年は、村の異様な空気に気付き辺りを見回す。

「気配が……人の存在が感じられない」

つい先程まで人がいたはずの名残が残っているのだが、まるで突然村から人がいなくなったかのように気配が無い。

それに加え、リエラはすでに意識が昏倒している。

非常時に限って厄災は訪れる。

気配は十二。

前後左右、青年を囲むように布陣された何か。

長年訓練された熟練者のような臭いが漂う。

「出てきてはどうだ？　別に気配を隠すほどの場でもないだろう」

――すでに、私達を含め、お前たち以外此処には居ないのだから。

「……」

前から現れた漆黒の仮面を筆頭にカゴメの様に囲まれながら距離を縮められていく。

「一体何の用だ？　私には貴様たちに狙われることをした覚えは無いのだが」

「……」

青年は問いかけるが、返答は無し。

内心で舌打ちをした。

この状況はヤバイ。

此方には殆ど意識の無い人間が一人抱えた状態。交渉の余地は無い。

変わって向こうは、恐らく隠密を得意とした部隊で、瞬発力だけで言えば確実に劣っている可能性がある。あくまで可能性だが油断は禁物。

数的に言えば十二対一。

記憶が殆どなく自身がどれ位の人数を相手に出来るかもわからない。

仮にリエラの剣を使うことも考えたが、相手との相性が悪い。

相手は暗殺者の類だ。

身軽で、なにか投げるものを持っているはずだ。
俊敏性に長けており、リエラの大振りの剣では動きを補足されてしまう。
そんな相手には小振りの物でないと相手は万が一にも出来ない。

何か。

何か方法は無いのか？――思い当たらない。
敵は少しずつ確実に距離を縮めてくる。
何かがある筈だ――あって欲しい。そうであると切実に願う。
それを呼び起こせ。
使え――何を。
本来の技があるだろう――どんな。
その手に掴んでいるだろう――そんなバカな事が。
お前の象徴が――象徴？
おまえ自身の理想が――理想？
おまえが追い続ける人物が――誰を追いかける？

刹那、何も無い野原に一人の男と、その背中をただ見つめ、余りにも険しい茨の道を行く男≪大きい背中≫の後を追う子供≪小さい「子供の」自分≫がいる光景が脳裏を掠めた。

そして、当たり前のように眼前に佇む鏡に映る自分が、二振りの双剣の片割れを、お前自身のものだと切っ先を向けながら言っている様な気がした。

「……なっ！？」

気がついた時には、青年の手に双剣が握られていた。

リエラを担いでいた肩は、リエラを地面に下ろしていたことによりフリーに成っており、青年は知れず戦闘態勢に入っている。

手に握られた双剣はそれぞれ長さが違う。

左に持つ一振りは長く、双剣に適した長さ。

だが、右に持つ一振りは、左手のそれよりかは短い。どちらも片刃であり、中華剣の風貌が見える。

驚愕を発したのは多分、漆黒の仮面たちと、青年自身に他ならない。

「これは……？」

青年は値踏みするように呟くが、記憶には無い。

青年が持つ二振りの剣を見ても思い出すことは無い。

だが――

「何故だがこの手に馴染む」

まるで、ずっとそいつらと共に居たかのように、そいつらと大地を駆け巡ったように、何かが流れ込んでくる。

それらは戦場。

この剣が戦ってきた歴史。

この剣を最も効率よく使う戦い方。

何よりも、手に持つ二振りの剣を舞踊のように綺麗に扱う青年。

自分自身≪己≫が見えた。

戦場で戦う自分が見えた。

ただ直向に己の願いを叶える為にずっと共にしてきた双剣。

その二振りは初めから青年の物。

青年が本より振るっていた剣。

馴染まない筈がない。

初めからその二振りは青年の為に創られたものなのだから。

自然と、握っているだけで力が増しているのに気が付く。

剣を持つ前と、持った後で体の能力が二段階以上上がっているのが理解できた。

鏡の中の彼が持っていたのだから、鏡の外の彼が双剣を持てない筈が無い。

漆黒の仮面達は、敵≪青年≫の不可解な現象に危機感を覚えた。

自分たちが知らない何かを遣って退けた敵に。

敵を早々に排除し無ければならない。これ以上野放しにして、不可思議な攻撃で倒されては元も子もない。

漆黒の仮面の一人は、懐に忍ばせてある極太の針。

極太の針と言ってもそれは、普通の男性の手に収まる位の太さであって、投合し易いものの作りになっている。

当然、殺傷用な為、矛は肉と骨を用意に貫く重さを兼ね備えている。

それを手に手繰り寄せた漆黒の仮面は、躊躇無く青年に向かって投合する。

速度は十分。

プロ野球選手の投げるそれよりも比にならない速い速度で近づいてくるのを、青年は難なく避ける。

まるで、初めからその場に居なかったかのように。針が貫くのは青年の残像。

剣を持っていない状態ならば、完璧には避けることなど不可能だっただろう。

だが、青年は剣を持っている状態。

身体的技能は剣を持つ前とは比較にならない。

だが、避けた針はそのまま、地面に横たわれている彼女、リエラに向かって直進する。

ある意味で、狙いは両方だったのかもしれない。否、狙いがリエラである可能性の方が高い。

速度を落とさない針は、リエラの頭蓋に突き刺さる筈が、何処からかの金属音と共に弾かれ威力を失い、矛先は地面に向く。

「狙いは私とリエラ……というわけか……」

針を弾いた青年は真後ろから放たれた針を、見ることなく半身ずらして左手の一振りで叩き落す。

たった一度ならまぐれと思っていたかもしれない。

だが、二度や三度続くとそれはもう、理解せずにはいられない領域だ。

一斉に放たれた針は、数を十は超えているにも拘らず、すべて青年の間合いに入った瞬間に弾かれ、叩き落され、その威力を失い、地面に落ちる。それも寸分の狂いも無く踊るように、そして決して傍にいる彼女に当たらぬ様にする技量。

決して彼女には当たらずに地面に突き刺さる。死角からの攻撃も意味を成さない。

それを、行く場か終えると攻撃は自然と止んだ。

大量の針が地面に突き刺さっている。数は百に届くかも知れない。

青年には腕に、弾いた針の反動で痺れが伴うが表に決して出さない。

「くっ……」

奴等に疲れた様子は見えないが、知れず、漆黒の仮面の誰かが苦虫を潰した様に苦汁を発する。

「いい加減、諦めてはくれないだろうか？」

青年の言葉には、虚勢も混じっている。

正直、本人≪青年≫は自分がこんなにも戦えるとは思っていなかった。

記憶をなくし、身体とのギャップがあったはずだが、いつの間にか二振りの剣を握る青年は長年の友のように双剣を扱った。

幾ら長年の友のように剣を扱おうが少なくとも、この状況は傍線一方のままで変わりない。

青年は決して攻めることが出来ない。

守るべき対象が気を失ってしまっているのだから迂闊に移動することも侭成らない。

変わって、漆黒の仮面にも針の数に限りがある筈だ。

それが後幾つなのかは青年には知れないが、かなりの攻撃力と純粋な質量を持つ武器なのだからそう数は持てない。

針が無くなったときに、突撃でもすれば確実に返り討ちにあう光景が漆黒の仮面達には想像ができた。

「……」

正面にいた漆黒の仮面が、他の奴等に目配せのような合図をすると、途端に全員が一定の距離を離し、そして、一斉に消えた。

「はぁ……」

張り詰めた緊張から身を戻すために一息。

手に持っていた双剣は、ガラスのように粒子となって粉のように砕け、地面に落ちる前に消えた。

ただ、不思議と不安や疑問は青年にはなかった。

自分が引き起こした現象は、自分が持っていた力だと何より身体が告げていたからだ。

「非常時に勝手に使えても、普段から使えないのはかなりの痛手だな」

さっきのは、殆ど偶然が引き起こした現象だ。

使おうと思っても使えない。

やはり、記憶がないせいだろう。

「それにしても、早く処置をしないとリエラが危ない。人が戻る気配がしないが、勝手に使わせてもらうとするか」

青年はリエラを背に乗せ、近くの民家に足を運んだ。

侵入した家にある物を使い、知識の最大限を使ってリエラを処置した後、青年は連戦した疲れがぶり返し、気を許し寝てはいけないと思いながらも睡魔に負けて泥のように眠った。

夢　「昔の夢、壊れていることに気が付いたとき」

◇◇◇

酷く、懐かしい夢を見た。

それはまだ、俺が子供で世の中の摂理を知らぬころの話。赤い外套を羽織う幾分昔の記憶。

傍には両親がいる。

顔こそ思い出せないが、多分、とても自分は愛されていたのだろう。

給料の少ない中、必死で俺と母の為に働いて休みの日に三人で遊ぶ。

どれだけ、そんなあたりまえが愛おしいと感じていたのか、幼い俺には分からなかった。

何時もの様に、三人でただ家にいて何をする訳でもなく、ただお互いを感じていた。

そのまま、ずっとそんな事が続くと思っていた。

すぐに、そんな幻想が壊れるとも知らずに。

鈍い、重苦しい音でみんなが入り口のドアをみた。

母と父は、目線で言葉を交わし、自然と父がドアに向かって、母に抱えられた俺は廊下の前に。

念のためにチェーンをかけて父はドアを開けた。

そして、父の首は地面に落ちた。

多分、反射的に母は俺の目元に手を置いて何も見せないようにしたのだろう。

だが、そんな意味は俺には無かった。

父の首が落ちた瞬間、何かの線が父の首を刎ねたのを目に焼き付けてしまったのだから。

だから、逆に光を失った俺の目は首を刎ねられた父の血を噴き出す身体をずっと写し続けていた。

言葉も何も発せ無い。

呼吸もまともに行われているかわからない。

鼓動はもしかしたら終わっているかもしれない。

母は叫びたいはずだ。

大声で泣き喚きたいはずだ。

愛する夫の殺される場面をみて冷静でいられるわけが無い。壊れ

てしまってもおかしくない。

だが、母には俺という存在が爆発するはずの感情のストッパーになっていたと思う。

逃げ出す母は震える足に鞭を打って俺を抱えて家のどこかに行く。

俺にはもう、分からない。

何も分からない。

何が分からないほどに何も分からない。

何に大して分からないと思っているのかが分からない。

気付けば、俺は投げ出されていた。

地面に放り投げられて、顔と肩から落ちて痛みが走るはずなのに、何も感じない。

そういえば、どうして俺はこうも枯れてしまっているのか。

母は、追いかけてくる何かから俺を守るように体を覆う。

が、何かの線で母は上半身の肩から腹部に斜めに走り、二つに分かれてしまった。

二つに分かれた体からは、小腸にあたる部位が辺りに散らばり、異様な光沢を放ちながらも血を流し続けていた。

俺は、ただ呆然とそれらをした原因を見上げた。

父と母を殺した男の瞳には何も無い。

そう。直感で感じた。目の前の人は、人の枠組みを超えたものだと。

そして。

目の前のやつは今の俺と同じ瞳をしているのだと。

ただ、分かってしまった。

目の前のやつにも、なにかがあったのだろう。大切な何かが。

今の俺のように、今まで溢れていた幸せという物が簡単に壊れることを。

そして、目の前の男もそれを溢してしまった一人。

もしかしたら、俺と目の前の男以外にもいるのかもしれない。

自分の世界を壊された人たちが。

それ以外に、俺に考えることは無かった。

親がどうとか、この後どうなるのか。自分が同じ末路を辿るかなんて微塵も考えなかった。

俺の世界≪硝子≫はすでに割れていた。

心≪硝子≫も割れ≪壊れ≫ていた。

感情≪硝子≫も割れ≪壊れ≫ていた。

ただ一つ。唯一、俺に一つだけ残ったもの。

写す事≪鏡≫だけは、残った。

そう、何もかもが壊れた俺に唯一残った術でその目を写≪・≫し≪・≫た≪・≫。

男の瞳の中にある感情を写≪・≫し≪・≫た≪・≫。

俺には、もう。

それ以外、出来なかった。

それしか、出来るはずもなかった。

昔から、俺の意思なんて無かった。

周りに影響されて、”母”のように笑えば幸せが来ると思って実行していた。

いつしか、無邪気な笑いは出来なくなっていた。いや、元から心からの笑いなんてしてはいなかった。ただ、周りを見て同調を行っていた、ただの一つの行動。

それは、俺が母親に父親が□□を振るっていたのを見て自分も巻

き込まれてからだろうか。

そう、その時から俺は周りを写してきただけだった。

”だから、本当は俺が目の前の男と同じ瞳をしていたんじゃなくて、両親を殺した男が、俺を見て思ったことが小さな子供の瞳と男の瞳が同じだと言うことを”。

それに気付いたのは、一対何時だろうか。

その記憶はまだ目覚めては来ない。

「危ない存在」

◇◇◇

「……！？」

青年は夢から覚め、薄らいだ意識の中、瞬時に目覚めた。

何かを感じ取ったのかと見えるが、青年は気を許して眠り、その間に何かあったのではという思いで目が覚めたのである。

「寝てしまったのか」

青年の言うとおり、すでに外からは朝特有の明かりが漏れ出している。

ただ、覚えているのは自分が懐かしい夢を見ていたという事。

ベットに寝かしてあるリエラを見て、特に異常な事も無く呼吸しているので青年は安心した。

朝の光の出入りを防ぐ布地を避けて窓を開ける。

サー、と心地よい風が窓を通して通り抜ける。

一見、向こう側にはとてもにぎやかな街中が見えるような気がするが、事実。

「やはり、人は戻ってはいないか」

昨日と同然、町に住んでいた人々が戻ってくる様子は見られない。

念のため、軽く見回りをして回るが、行動は結局無意味だった。

一通り町を調べ終えた青年はリエラを寝かせている住居に戻った。

今朝見た状態と変わらずベットに横たわる彼女に青年は少しの笑みを洩らし、どうせ起きたら腹を空かせるだろうと思って軽く行きめいて袖を捲くり、台所にたった。

青年の見る限り、現状、探し出した食材はどれも見たことの無い物バカリであった。

考えて見れば不思議ではない。

そもそも、青年自体、この世界の住人でない可能性が高いと思っているのだから。

思い浮かべて出てくるのは、米、味噌汁、または、パンなど、以前食べていたような気がするものばかり。

次に出てきたのは、カレーライス。

「ああ、――カレーライスよりもハッシュドビーフの方が好きだったな……」

一度、思い出したら滝のように食材、以前食べていたものが流れ

出て来た。

「どの食材も知らないものばかりだが、要は炒めてみるしかないな」

青年は、取捨選択し、依然食べていた食材と似たような種類のするものを割り当て、手に届くところにある香辛料らしきものを一度手に取り、味を確認してから炒め、味付けをした。

他にもう一品だけ作ったが、あまり料理はしたことが無かったため出来の良いものにはならなかったが、ちょうどリエラが起きそうな反応をしたので、皿に盛り付けてテーブルに食卓の準備をした。

食事の準備を終え、リエラを起こそうと寝ている彼女に近づいた瞬間に彼女は飛び上がった。

「ふぇ…？」

「……」

物の数秒、青年の時間は止まった。

いや、素直に驚いたと言っておこう。

――こんな起き方をする人を見たのは人生で初だろう。

そもそも、ふぇってなんだ？

関口一番に、そんな言葉を発する人間が存在しようとは思わなかった。

青年は止まったまま、起きたばかりの彼女は未だ寝ぼけ眼である。

そんな朝の一場面を、青年は大切に心に仕舞い、心から笑みが出た。

◇◇◇

「それにしてもびっくりしたぞ。飛び起きてふぇ、なんと言うとはな……」

青年がそう言うと、椅子に座り食事に手を伸ばしていたリエラの顔が赤く染まり罵声がとぶ。

「仕方ないじゃ無いですかぁ！！　朝は弱いんですよ！！」

「弱いってレベルではないと思うのだが。女性としてもう少し品性と言うものを大事にしたほうが良いと思うのだがそこの所はどうなのかね？」

一、女性として。

そう付け加える青年の言葉に彼女は言い返せずに小さくなるしか行動を起こせなかった。

「まあ、少しずつ直せば良いことだな」

苦笑いしながら話す青年の言葉にさらに彼女は小さくなっていった。

食事を終えたころに青年はリエラに問う。

「まだ、体が本調子でないところすまないが、昨日、私たちがある組織に襲われたことは覚えているか？」

青年と目を合わせて彼女は、青年が真剣に事を聞いているのに反映して答えた。

「いえ、この町にたどり着く前にすでに私は意識が殆どありませんでしたから……」

「そうか。改めて説明するが昨日、推測だが、隠密を企業とした隊に襲われた。敵の数は十二――」

青年の、敵の数は十二と言う数にリエラはすかさず反応した。

「十二って、どう撃退したのですか！？」

「どう、と言われてもな……」

青年は困ったように口を閉ざす。

青年の不思議な能力で、いつの間にか両手に二振りの剣が握られており、それで相対してた。

と言うつもりは現状青年には無かった。

だが、それでは説明が付かなくなるので。

「リエラの剣を使って対応した。一度ならず二度までも勝手に使っ

てすまないな」

彼女の武器を勝手に使ったことを青年は謝ったが、リエラが聞きたいことは違っていた。

もちろん、そんなことは青年は理解していた。

ただ、どうしても誤っておきたかったのは単に悪いと思ったからである。

「剣のことは良いです。ですが、一人で十二もの人数を相手にするのはどうも普通に考えて無理があるように思えるのですが…」

リエラの言っていることは最もだ。

多少、青年はリエラよりも格上の人間だとしても、十二の人数を相手に出来るとは思ってもいない。

ここで、青年は悟られないように嘘をついた。

「私だってそんな事が出来るとは思ってないさ。ただ、最初の奇襲が成功しなかった為にすぐに撤退しただけだ」

「そうなのですか？」

本心を探るような目に負けそうになるが、嘘は付いていないと強い目で見つめるとリエラは「うそではないようですね」と引き下がった。

青年は彼女の様子にホッとし、一先ずの逃げ道を確保できた。

知られてはいけない。

感ずかれてもいけない。

目の前にいる彼女に、自分が背負わなければいけないことを知られてはいけない。

記憶喪失の中に含まれている知られてはいけないものは、こ≪・≫の≪・≫世≪・≫界≪・≫で≪・≫も≪・≫異≪・≫端≪・≫の≪・≫は≪・≫ず≪・≫だ≪・≫。

確証は青年自身にも無かった。

ただ、言うならばそう感じる。

あの時の、自分でも意識せずに両手に持っていた剣を見たときに、少なからず漆黒の仮面達から動揺していることが分かった。

つまり、そんな異端を起こせる奴等を見たことが無い、または、似たような異端を使える人物はいるが青年が使った異端はそれを凌駕するものだという事。

（結果、何処へ行こうと俺は異端だと分からせてくれるな）

青年は皮肉下に口を歪ませる。

記憶が無くとも、感覚で理解しているというべきだろう。

薄っすらと浮かび上がる光景でも青年には、異端を見せるたびに

冷ややかな目や恐れを抱く目、化け物を見たかのような目、恐縮して只管に頭を下げ続ける人々。

嫌な光景しか浮かびはしない。

本当に欲しかった物が浮かび上がらなかったことに悲しみを感じた。

「まあ、何にせよ、リエラが誰かに狙われていることは確かなわけだが……まだ話せないのであろう？」

「……」

俯くリエラの気持ちも分からないでない。

暗殺者に狙われるということは、それ相応の地位を得ていて、さらに脅しや人質としてかなり有効な人材に置いて最も価値を発揮するというならば、今この世界では、戦争こそ勃発してはいないが、万が一にリエラを確保した場合と同時に戦争が始まることが予想される。

あくまで予測の範囲外であるが、十分に考えうることである。

リエラという人物が、貴族としてかなりの高い地位の子女で、さらに親がかなりの権力を持つ場合。

貴族ではなく、王族の直系の場合。

予想される二つの可能性。

だが、その二つが最も秘密を隠したがるリアラの行動に裏付けてしまう。

だが、そうなると何故あのような森にいたかが不可思議な点だ。

身を隠さねば成らぬ彼女にとって、個人の行動は最も避けるはずなのに。

それでは、予測は違っているのか？

そう考えても答えは出てこない。

青年には、この世界が何なのかさえ全く知らないのだから。

記憶を無くしている所為で、彼女の宿している目が、誰の瞳と同じだったのかは気付けなかった。

◇◇◇

着ていた赤い外套を脱ぎ捨て、中にきている軽装を取り外してただの半袖のシャツの状態で椅子に腰掛ける。

先の会話によって、変に蟠りが出来てしまいお互いに何も話さなかった。

沈黙の中、食事を終えて食器類を洗い終わった青年は何もすることなく呆然と椅子に座っていた。

会話が無い状態が続く。

どちらも明後日の方を向いて、一人の空間を作っていた。

やがて、ラフな服が目立つ青年が寝息を立て始めた。

すると、音を立てない用にか、ゆっくりと座っていた椅子から立ち上がり青年の下に近づいた。

歩く彼女の瞳には、何も写されていなかった。

光は無く、闇に沈んだ瞳。

瞳の中に広がる闇は、無限大の闇だった。

その目を見るのが一般人ならば、忽ちにその瞳の闇に吸い込まれそうな恐怖を感じるほどの闇が広がっている。

もし、この場で青年が起きており、彼女の姿を見たならばどのような事態に陥るかは分からない。

実際に、そのようなことは起こるはずもないのだから分かる必要も無い。

無限大の闇を宿した彼女が青年の正面に立ち、開いている手で何処からかナイフを取り出す。

そのナイフを、そのまま青年の首筋に当てる。

当てるだけ。

決して斬りつけることはしなかった。

「私は何をしているんだろうか？」

彼女は自問自答しながら、手にしているナイフを懐に収めた。

「私は消したほうが良いと思うのだが……あの御方が言うのならば致し方ない」

彼女は再び、元の座っていた場所に戻り、その瞳を元のリエラのものに戻した。

青年は、体を一切動かさず“眠っていた振り”をし続けた。

彼女にとっての失敗は、青年がそれほどまでに彼女自身を警戒していないと勘違いしたのが仇となったのだろう。

普通に考えて、記憶喪失という身で警戒するほうが可笑しいのだろう。

だが、青年には魂レベルで刷り込まれているのだ。

青年にとって常に戦場地での生活を抜きにして、信頼できる人物が生涯にたった二人しかいなかったのだから。

そのことを知らぬ彼女も然り、青年自身も未だ知る余地は無かった。

青年は、寝たふりを続けた中、これ以上彼女が何かを仕出かす気が無いのを、彼女の行動で確認し眠りに付いた。

夢　「昔の夢、誤った道を歩む切っ掛け」

◇◇◇

また夢を見た。

どうやら、前回見た夢の続きらしい。

前回、俺の両親は殺された。

そのとき、両親の寄生を聞きつけた周りの住宅の民間人が不審に思って警察に連絡をしたらしく、家の中で、目に光を宿していなかった俺と、体をバラバラに引き裂かれた両親を発見した警察が尋常な程の大変な事件だと判断して沢山の警察を集めて半径数キロに包囲門をしくように命令していた。

警察が、無線機を駆使して、住宅街で不審な人物を見なかったかという聞き込みをしたが、足取りは一切つかめずに翻弄されていた。

事件後、俺は精神的な疾患と判断されてで入院させられた。

正直言って、当時の俺にとっては精神を取り戻そうとする医師達の働きは無駄だった。

何をされても、何を俺にさせようとしても何も感じることが出来なかった。

そんな状態が一年以上続き、医師達は根を上げて俺を放置した。

金も払えないそんな子供でも、親がすでに死んでいて、他に親戚と呼べる者達がいなかった為に強制的に財産の所有権は俺のものとなったが、人間の欲がそれを毟り取っていった。当然病院も容赦なく入院費を毟り取った。

一年ばかり入院して、終には病院から強制退院させられた。

未成年な年頃なので、親のいない子達が集まる孤児院に預けられたが、誇示院内の子供皆、同じような課を押している人間ばかりで虫が悪く大人の見張りがないとき抜け出した。

当然、行く当ても無くホームレスとしてできるだけ遠くの公園でひっそりと暮らしていた。

万が一に見つかってしまったら孤児院に逆戻りだからだ。

生活はとても辛く、一日に食事が無い日が多かった。

ある日はパン屋に足を運び、売れ残ったものや失敗作を恵んでもらった。

コンビにでも同様に、必死に頼み込んでおにぎり等をもらっていた。

皆、初めは拒否するが、俺の姿を見た人たちはある程度の事情を把握してくれたのだろう。

子供にしても余りにもやせ細った顔に、ボロボロの衣類。

虚待されているとも勘違いしているのだろう。

そうして、哀れみの視線と、いらぬ優しさが篭った眼差しをくれるのだ。

だが、何時までもそうしているのは疲れてくる。

「なんで生きようとしてるのかな……」

特別行動理由が無い。

腹が減るから食べ物を欲す。

眠くなったから睡眠を欲す。

ただそれだけ。

「なあ、お前こんなとこで何してんだ？　暇なら一緒に遊ぼうぜ」

唐突に声をかけられた。

一体こんな自分に何の用だと思った。

俺を嘲笑いに着たのかと思った。

嫌々ながら、プイ、と顔を声のしたほうに向けると、一人の少年がいた。

ただ、自然と声をかけてきた人物の顔の高さに視線が行った。

その顔を見たときに、俺はまるで身に纏う毒素が全て削がれた気持ちになった。

全身に何かが駆け巡るような感覚。

先程、どうして生きようとしているのか。

答えを導こうとしても用意には出てこないものを探していた。

だが、正直に言ってしまえば、そんなことを考えていた自分がバカらしく感じるほどに気分が浄化された。

単純に一言で表すならば、”光”。

輝かしい光。

俺が考えていたこと全てを打ち払って、純粋な笑顔に包まれた気がした。

そして、思ったんだ。

俺が欲しかったものの一つ。

ずっと、写すことでしか浮かべられなかった笑顔。

彼と関われば、自分も今現在彼が浮かべている笑顔を浮かべることが出来るのではないかと。

俺は、この記憶を絶対に忘れないだろうと思った。

何時しか時が経って、記憶が摩擦して行こうとも、目の前の溢れんばかりの『笑顔』を決して心に刻み続けるだろう。

そう。

これが、俺の始まり。

決して報われない道を歩むきっかけといっていい出会い。

これが運命というならばそうとしか思えない。

良くも悪くも、これが俺の物語が動いた鍵なのだから。

決して、心から消え去ることは無い。

だが、何時からだろうか。

その果てにある物が、掬われぬものだと知ってしまったのは。

俺は、何の為にこの道を歩んだのだろうか。

「誰かと重なって見えた」

◇◇◇

意識が呼び起こされて、ほんの少し目を開けてみると、すでに夜の訪れが感じられる月明かり（実際、月の明かりだとは知れないが）と肌寒い風が体を刺激する。

与えられる刺激によって、眠け眼の体に鞭を打って上体を起こし、調子を確認しながら飽きっぽなしの窓を閉める。

「はあー……」

青年はため息を吐く。

理由は単純なことだ。

いくら、表面上は生易しい笑顔を浮かべている人間でも、裏の顔では何の感情も抱かずにことを起こす人間がいることを。

そんな人間が万が一にもすぐ隣にいるのに、自分が夢を見るほど熟睡をしていたことに飽きれを感じずにはいられない。

何時殺されていても可笑しくは無いのだから。

身を預けていたソファから体を起こして立ち上がる。

青年は、そばにいるはずの女性の姿を確認する為にリビング内を見渡せば椅子に腰掛けながら寝ているリエラが見えた。

寝ている彼女の姿は、本当に少女の寝顔そのままで愛らしささえ感じられる。

そんな彼女がどうしてあのような何も写さないような瞳を宿してしまったのか。

目を開けていなくとも、感じ取れた。

青年は、記憶が無く不安定な自分ながらも彼女を決して見放さないことにした。

見放してしまえば、彼女は何れ取り返しの付かない道を辿ってしまうような気がした。

「させない。そんな風な道を辿らせはしないっ……！」

自然と拳を力強く握って、爪が食い込むのを忘れたように振るわせ続けた。

彼女の中に存在する裏の黒い面に覆い尽くされる前に、気付かせなければ。

彼女の中の年相応の優しい彼女が消えてしまう。

二つのそれはどちらも本当の彼女の一面。

単に裏表に過ぎない。

そのことを理解せず、拒絶してしまったら彼女は壊れてしまう。
そうならないように、青年は監視されながら逆に監視することにした。

翌日明朝。

昨日の夜、目を覚ましたリエラと共に廃村から出発する前に、空き家となった世帯で旅で必需品となる水や食料を回収した。
回収する際、リエラがその行為について難色を示していたが、青年は村人達が帰ってこないと返すと、帰ってくる可能性も無きにしも非ずと返してきた。
正直言ってその可能性は限りなくゼロだと青年は思った。
廃村となった村は、彼らがたどり着く数時間以上前に何かをされた。
きっとそれは青年の常識では証明できない手段を用いた筈だ。
そうでなければ、捜索していた各々の家で生活観がでるわけが無い。
つまり、考えるべきは方法ではなく理由だ。
何故、村人達を消さなければ為らなかったのか。
それは青年か、リエラ。

そのどちらかが狙われていることとなるが、多分此度の標的はリエラなはずだ。

仮に、リエラの属する組織では青年を狙う。（そのことについては昨日のリエラの行動が示している）

別の組織ではリエラを狙う。

廃村にたどり着いたときに現れた漆黒の仮面達はその場にいた二人を殺そうとした。

万が一、リエラの属する組織と漆黒の仮面たちが属する組織が同じならば何故リエラ諸共殺そうとしたのか。

リエラは青年の監視として派遣されたのに何故。

はなからリエラを殺すきで、青年の監視を命じたのならば矛盾している。

では、リエラと漆黒の仮面達が別組織の場合。

上記で述べたのと同じく、青年とリエラを殺そうとした。

青年は単に傍にいたという理由で殺されるはずで、リエラも殺す手筈。

生きている状態ではなく、死体を必要とした？

それとも単に、組織同士で邪魔だったからか？

襲われた時点でリエラは完全に意識を失っていた。

それを青年が間違える筈が無いと断定できる。

なら、どちらの組織でも村を廃村にする理由はあるが。

纏めれば、別々の組織の場合だと何処からか仕入れた情報でリエラがいるのを狙った。

同じ組織の場合はかなり不可解なことになる。

襲われた時点ではリエラは意識を失っていた。

漆黒の仮面たちは尚もリエラを狙った。

もし、青年に抗う力が無かったら？

リエラを守ることができていなければ？

それは。

（……単なる娯楽）

青年はそう思った。

自分は量られていると。

自分がどれだけそのリエラを寄越した人物を楽しませてくれるのか見て遊んでいると。どのような手段で青年の情報を得たのかは知

れないが。

そのような事を考えた上で、リエラに言える筈も無い。

「リエラ、云わばこれは勘だ。私は自分がどのような人生を歩んできたのかは思い出せないが、こういう状況を何度も経験した様な感覚を体が教えてくれる。信用してくれなんていうつもりは毛頭無い」

「……」

彼女はまだ、納得の言っていないようだったので追撃をした。

「問だ出す様で悪いが、では、このまま何も持たずに君の向かう地にたどり着けるのか？　水も、食料もなしにたどり着けるような距離にあるのか？　私にはそうは思えんな。そうでなければ態々何日も滞在する気でこの地を訪れたわけではあるまい」

「っ……！」

リエラは血が出そうなほど口を強く噛み締めている。

本当なら物色ということをしたくない。

だが、しなければ目的の地にはたどり着けないことを。

彼女は渋々といった感じに必要なものをかき集めた。

そして、旅路の準備を終えて今に至る。

実際に、青年はリエラの感情の動きに随分と目を奪われていた。

先日、寒気すら感じるリエラを知っているばかりか、本当にこの感情は演技なのか？　と疑ってしまうことがある。

仮に演技でなく本心ならば、それはもう限りなく二重人格に近い。

演技ならばとても芝居の才能が有るというべきか。

はっきし言って青年にはリエラが分からない。

壊れている自分が言うべきでないはずだが、引けず劣らずリエラも壊れているのかもしれない。

しばらくは様子見を試みながら数日がたった。

「ありえない存在」

◇◇◇

リエラと共に、目的の場へと進む数日間には特に異常なイベントは無かった。

夜な夜な、廃村と化した村から拝借したテントの中で、青年はこの世界のことを聞いた。

今までに、異常な外部の人間との接触で、体力を消耗して疲れを癒す為の療養に時間を割いていた所為で世界の事を聞くタイミングを逃していたので、今を絶好のチャンスであったので。

この国の成り立ち。

歩んできた歴史。

世界地図。

魔物と呼ばれる、動物とは一線を期した凶暴な生物。

知能が高い魔物は、人間よりも扱いづらい。

確かに知能がある生物は厄介極まりないと思うが、一番に警戒すべきは人間だと青年は断言できる。

その言葉についての確証は無い。

まだそのことが完全に理解できるほどの記憶を夢で見たことは無い。

が、何より心が訴えているのに記憶のない俺が敏感に感じ取ってしまった。

その事を青年がリエラに告げた時の反応は四曲当たり前である反応とは違っていた。

余りに迷い無く『一番警戒すべきは人間だ』と言われてもピンとこない人もいる。

そういう部類の反応を示すことが出来る人はさぞかし幸せな道を歩めているであろう。

何年か先では分からないが、兎に角人間関係で問題はない奴等の認識だが、青年が断言した言葉をそのとおりだと同意することの出来る奴等はハッキリ言えば不幸な部類の道を歩まざる終えなかった人たちに違いない。

”あの”世界とは違い、人権が極端に無い”この”世界では不幸な人間など腐るほどに溢れ返っていそうなのが想像が出来てしまう。

リエラは、特筆するべき反応こそしなかったが、その反応は十分に青年の言った言葉を身をもって知っていることになる。

そんな話を説明の合間に話してしまった為、空気が重くなった分、取り返すように青年が話を元に戻した。

続いて話したのは、失われてしまったものと、代償にして得たもの。

どうやらこの世界では”魔術”という物がある特定の人物達の一般らしい。

その昔は、”魔法”が存在していたのだが、ある世界大戦の結果廃れたという結果で子孫は途絶えたらしい。

正式なところは分かっていないらしいが、もしその子孫が残っていたのなら――未だに身を隠しているのか？　などと要らぬ考えをしてしまう。

世界に語り継がれる歴史が必ずしも正しいとは限らない。

必ずどこかに綻びがあって偶然にあるべき場所に別のピースが収まってしまっただけに過ぎない。

何故このようなことを話しているかというと、何事にも例外があるとしか言いようが無い。

たまたま、今までその例外が表に出てこなかっただけで、何時現れても可笑しくは無い。

自分はその例外に属する存在なのだから≪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・≫と、青年は内心で吐き捨てた。

リエラの言葉を、頭に深く刻み込みながら淡々と世界の知識を蓄えていった。

そして、ハッキリした。

（この世界は、私が過ごして来た世界とは別物だな……）

初めから、意識はしていた。

軽い違和感、と言うべきだろうか。

何故か自分がこの世界とはうまく合っていないような。

収まりきれていないような感覚。

本来のように歯車が回っていない回転。

青年のこの感覚は口で説明の仕様が無い。説明しても上の空状態になってしまいかねない。

感覚の問題なので、誰にも理解出来るものではないと思っている。

そもそも、青年は自分のことを誰かに話つもりはない。

ある程度の話を交えた後は、交代で見張りをすることにした。

◇◇◇

青年は、所持している毛布の中で包まりながらチラチラと辺りに顔を動かす。

実際、目で見ずとも気配である程度何かが近づいて来れば気付くのは容易だが、落ち着かない。

静けさが目立つ為、やけに妙な不安感を青年に抱かせる。

リエラの話によれば、この地域一体は魔物の生息率が他所とは比べて低いと言っていたが、どうも腑に落ちない。

信用していないわけでも無くはないが――リエラが嘘をつく必要もないと思う。

だが、何よりも自分の感覚が異変を察知している。

（この感覚は一体何だ？）

考えをめぐらせても答えなど出るはずがないのに、思考の渦に嵌ってしまう。

風が吹く。

見張り番をする少し前まで、燃えていた炭が風によって音を立てて絶妙なバランスで保っていた形が崩れた。

そして、また、風が吹いた。

「……！！！？」

刹那、青年は飛び起きるように何かに反応した。

目を血走らせ、必死になって風が吹いてきた方角を睨み付ける。

幾ら、目が良いといっても今は夜。

夜目に特化しているわけではないので昼間と比べれば幾分が劣ってしまうが、そんなことは関係名というばかりに闇を凝視する。

何も見えない先。

写されているのは闇。

だが、やがて点のような粒が少しずつ大きく為っていく。

それは、輪郭を形成し、残り一キロといった距離まで迫ったときに青年は戦慄した。

すさまじい速度で、青年とリエラが要る場所の真横を通り過ぎる人間。

通り過ぎる間際、確かに、青年と通り過ぎた人間と目が合った。

青年は呆然と、通り過ぎた人物は口元を隠した上からでも分かる笑み。

数秒、はたまた数分か過ぎたころには、もう青年とリエラ以外辺りにはいない。

もし、今魔物に遭遇したら青年は反応できないくらいに昏倒している。

「……何故…だ。あの人が要るはずが無い」

青年は否定する。

先程すれ違った人物の存在を。

本来、いる筈の無い人間のことを。

「……兄さん？」

夢　「昔の夢、たった一人の兄」

◇◇◇

「……」

青年は呆然と立っている。

魂が抜けたように、本当に驚きを通り越して本来するべきでない反応をしてしまったかのように。

青年は思っていた。

ここ数日、特に異常なイベントは無かったと。

だが、それは嘘だ。

青年は、数日の間に、一つの夢を見た。

青年にとっては、その夢は重要なイベントの一つ。

記憶を取り戻すのに、最も手がかからない方法。否、記憶を取り戻すのに他に手段は無い。

だから、いる筈の無い人間のことを知っていた。この世界には自分同様にいてはいけない存在。

それが、兄だと何となく分かった。

分かってしまったのだから。

青年は、空を見上げる。

その空は、菱が輝く景色から、夢で見た記憶に水面が揺れるように変わって行った。

◇◇◇

俺は、その子供の笑顔に引かれた。

別に男女の意味ではない。

純粋に、その笑顔が欲しいと思った。

そんな笑顔を浮かべて見たい。

もっといろんな笑顔を浮かべる人を見たいと。

俺は、子供に興味を示した。

今までだったら、絶対に聞かないようなことを聞いていた。

「寝てるだけさ。君こそ、俺に何のよう？」

俺が聞き返しただけで、目の前の子供はパァっと顔を花が咲いたように笑顔になった。

俺が無反応を返すと思っていたのか知れないが、羨ましかった。

本当に、目の前の人物が浮かべる笑顔は純粋だ。

純粋すぎて、此方まで自然と気分が良くなって来ている。

「僕はね、いま遊ぶ子がいないんだ。一緒に遊ばない？」

「うん、いいよ」

断る気持ちなんて一切無かった。

「じゃ、俺んちおいでよ」

新密度を上げるのに、家に行くのは最も良い案だと思った。

この誘いは絶対に受け入れるべき提案。

「そうだね、じゃあ案内してよ」

俺は、彼の案内される道を行きながら当たり前のように子供の話に花を咲かせた。

彼が語るヒーローの話。

テレビに出てくる仮面ライダーや戦隊物。

正義についての話だった。

「ヒーローってほんとにカッコイイよな～。そうおもわない？」

「うーん、あんまり思わないかな」

あんまりという曖昧な表現をとったのには、実際にヒーローというものをカッコイイなどと思ったことは無いからだ。

実際に、家のテレビで世界を救うために働く番組を見たことがあっても、救われている人たちは表面上だけだったからだ。

救われなかった人たちは沢山いるはずなのに、そういう描写はされていない。

何か犯罪を犯す人だって、その犯罪を犯す理由が有るはずだ。

たとえ犯人が、唯単に事件を起こしたかったわけではない。

きっと心に、何かがあったはずなのだから。

この世に正常でいられる子供は、その子の家庭を包む空気が正常であるからだ。

周りの人たちの当たり前が、子供の当たり前を形成する。

淀んだ家庭で育てば、淀んだ子供が生まれる。

俺は、どちらかといえば淀んだ家庭だった。

しかし、母がいた。

完全に淀みに染まらなかったのは、母がいたからだ。

だから、俺は微妙な位置だが、正常のほうにやや傾いている状態で踏みとどまれている。

もし、母がいなかったら俺は淀んだ方向に傾いていただろう。

それを考えれば。彼は、輝かしい笑顔を浮かべている彼は、正常の向きに針が限界までさしていることに違いはないだろう。

「そっか。お？　そろそろだ家んちだ」

そう言って彼が立ち止まった場所は大きな門のような場所だった。

「なあ、もしかしてここ≪・・・≫？」

「ああ、ここだよ」

彼は、俺の言いたいことをまるで分かっていたかのように笑いながら、ここを強調して言った。

立ち止まった場所は、俺の背丈をゆうに越える鉄の門の前で、家を囲む塀は一般の一軒家を六つ以上並べた大きさだった。

彼は俺と同じように背丈が小さく門と比べたらかなり奇怪に写る。

どうやって入るつもりか見ていたところ、門の脇に小さい子供用の大きさのドアがあり、ドアノブがしっかり付いていた。

「さあ、入れよ」

家に入ることに促されて、入った先には和風な武家屋敷に広い庭

が見えた。

俺の驚きを見越して、呆然としていた俺の背中を押しながら屋敷の中へと歩かされた。

屋敷内は、まるでテレビで舞台にされている時代劇の風貌をしている。

廊下が続いていて、障子が張られている木製の扉。

その一つを開けた場所は彼の与えられている部屋だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9115z/

交差する信念。やがて、一つに（仮）

2011年12月30日02時52分発行